

パトナの雄叫びが茶畑の丘を震わせた。

急斜面を這うように伸びる農道のカーブから、愛華幸助は動物園を振り返った。

水鳥の池が西日を反射して、あどけない少年の顔を照らす。

幸助は眩しそうに手をかざした。しかし、その眩い光とは対照的な現実が、同じ視界のはずれにあった。

時代を感じさせる、青い陶器瓦の木造二階建てアパート。

彼の新居はその二階。いちばん日当たりの悪い2DKの部屋だ。もともと、老朽化の進んだアパートに、貸間として使える部屋は限られていた。条件が悪く、空室がちだったぶん傷みの少ない二戸だけが、貸し物件として残ったということが多い。

孟宗竹が生い茂る山の斜面と、動物園の高い塀に挟まれた狭い土地に、ひっそりと佇む古アパート、  
“ほてい荘”。

幸助は慌てて視線を逸らせた。

母親の悠子は、今夜から街のスナックで働くことになった。

なぜ両親が別々に暮らそうと決めたのか、小学三年生の幸助には、その訳は知らされていない。だが過去にも一度、悠子は離婚を経験していた。今から六年前、幸助が二歳の時。したがって三つちがいの妹、奈津美とは種ちがいの兄妹ということになる。

ピー、ピュロロロ。

上空で大きな螺旋を描くように飛んでいた二羽の鳶が、幸助の目の前を、サ、サーッとかすめていった。

ピー、ピー。

翼の先から先まで、三メートルは有ろうかという大型の鳶だ。

動物園の中ほどにある、ピクニック広場目がけて急降下していく。

その先にあるのは、誰もいないテーブルの上に拵げられた弁当。

ピー、ピー。

谷あいには乾いた鳴き声が響き渡る。

異変に気づき、慌てて席に戻ろうとする客。

ターゲットをロックされたミサイルのように、真つ逆さまに突き進む二羽の鳶。

傍からすれば、たかが弁当。しかし客にしてみれば、むざむざ盗られるわけにはいかない。

一方、鳶にしてみれば命をかけた真剣勝負だ。

幸助は、ぽかんと口を開けたままその行方を見守った。

すると、

「ぼうず、そこでなにようしてるだ？」

誰もいないと思い込んでいた幸助。

はつと振り向いて声の主を探す。

「ここだここだ」

山側の茶畑に、一風変わった老人の姿があった。

大きな柿の木の枝に使い込んだ鎌を引つ掛けて、電車のつり革に身を任せるようにして立っている。しかしそれきり老人は、放心したような顔で、じーつと幸助を見下ろしたままだ。

そしてどういうわけか幸助の方も、その老人から目を離せないでいた。いつから見られていたんだろう。

そう思うと幸助は、なんだか気まずいような、ちよっぴりしゃくにさわるような、妙な心もちになった。

「朝つから雑草抜き過ぎて、腰んひん曲がっちゃった」

老人は、のっそりと動きだすと、握っていた鎌を茶の木の上に無造作に放り投げた。

「どーれ、ちよっくら休むとするか」

老人は、うーん、と掛け声だけのような伸びをすると、両手で作業着をはたきながら、幸助のいる農道に向かつてゆっくりと下りはじめた。

まるで引退したかかしから引き継いだような麦藁帽子。汗染みた手拭い。そこだけ忍者のような黒い手っ甲。

それは幸助がはじめて見る、茶農家の出で立ちだった。

「坊やもいっしょに、いっぶくするかね」

別の茶の木の間から、ぬうつと顔を出した老婆が、戻りかけた幸助を呼び止めた。

「あつ！ トンビ……………」

幸助は慌ててピクニック広場に目をやった。

しかし、そこにもはや鳶の姿はなく、遙か上空にそれらしい二つの影が悠然と浮かんでいるだけだった。

「ぼうず、どこから来た？」

聞きなれない粗暴な物言いが、幸助の口を閉ざしていた。

老人の名は長澤作次。ほてい荘前の林道のような市道を、行き止まりまで上り詰めたところに住居を構える、大きな茶農家だ。作次の傍らでお茶の仕度を始めたのは、彼の古女房、珠代だ。

彼女は古びたバッグを抱えたまま、農道の端に腰を下ろした。

「ひよつとしたら坊や、先だつてほてい荘に越してきた愛華さんちの子かね？」

機嫌よさそうにそう言うのと、珠代が置いたバッグの中から、年季の入った水筒が、ごろんと頭を出した。

「ほう。あれに、あれしたつてか」

作次は日焼けの込んだ赤黒い顔を、珠代に向けた。

「そうですよ。ほてい荘の二階に引越してきたんだよね」

たつたいま出会ったばかりの老婆が、どうして自分を知っているのか。不意に名前を呼ばれ、幸助は五十円玉を出したつもりが、七十円おつりが返ってきた時のように、どう返答していいのか判断がつかなかった。

「坊やも、こつちに来てお座りなよ」

珠代は大様な仕草で、バッグの中から、漬物が入ったタツパやら菓子袋やらを引っ張り出し、それらを新聞紙の上に拡げていった。

その横に作次も、よっこらしよと腰を下ろし、

「マナカ？」

と訝しげな目を、茶の木の根元に落としている。

「マナカつてえなあ、ここえらじや聞かにはあ、あれだでな」

作次は小刻みに頷きながらそう言うのと、草の浜が染み付いた指で鼻を摘まみ、ふんつと鼻汁を飛ばした。

「ほうかあ。あれになあ……あれしたつてか……」

作次は呑気な調子で言い、前歯の抜けた口でビスケットを、ぱくりとやった。

「お爺さん。今日もまた、あれ、が多くありませんか。あれが……」  
珠代は半分諦めたように言った。

「あれで通じるんなら、あれでええだで」

胡坐をかいた膝の上に、ビスケットのかけらが、ぼろぼろと落ちていっているのに、お構いなしに食べつづける作次の顔を、幸助は不思議なものでも見るような目で眺めている。

「しょんないお爺さんだこと」

「待てよ。……おうおう」

作次は顎を上げて、突っ立ったままの幸助の顔を見上げた。

「そういうあ、先だつてイマイチ不動産からそんな話しよう聞いたような気がすらあ」

作次は、にやにやしながら、縁のかけた湯呑茶碗を珠代に差し出して、お茶の催促をした。

「またそんなこと言つて。今井さんですよ、今井不動産」

珠代は、またか、というような顔で言った。

「あのアパートは、お爺さんの持ちものなんだよ」

幸助の視線の先の菓子袋を開けながら、珠代が言った。

「番茶で坊やの口にあうかわかんないけど、まあお飲みなよ」

座ろうとしない幸助の足元に、珠代はお茶を置いた。

「ありやあ、もうでやあぶ古いでな、あれしよつかって話しよしてたとけえ、ぼうずの母ちゃんが、どうしても借りてやあ、って頼んできたつちゅうだに。まあ、蓼食う虫もなんとかって、言うけえがな……」

訛りがどんなにきつなくても、作次が何を言おうとしているのか、その表情を見れば幸助にも十分に察しがついた。

「何言うんですよお。住んでくれてる人には、感謝しなきゃいけませんよ」

珠代が少し強い調子で作次をいさめるが、

「よく言うだあ。税金だの修繕だの、婆さんだつて、ふんとはあれなくなりや、せいせいするすら」

古アパート同様、その住人までもが厄介なお荷物だというように、作次は眉を寄せた。

ほんとうは、自分たちには立派なマンションがあるのに、どうしてあんなアパートに引っ越してしまつたのか。なぜ、見ず知らずの年寄りに、こんなことを言われなければならないのか。

幸助は泣きたい気分だった。

「そう思っているのは、お爺さんだけですよ……」

珠代の声が裏返った。

「ぼあさんは外面がええで、いつだって本性はわからん」

「いいえ。ほてい荘ができた時、最初に入居してくれた末長さんに感謝したこと、わたしは忘れていませんよ」

日に焼けた顔を赤くして、珠代はきつぱりと言った。

「そんな昔んこたあ、とづくに忘れた。ハハハ……」

作次はうそぶいて、煙草に火をつけた。

あんなアパート。

幸助は悔しそうに唇を噛んだ。

「さあさ、こんな爺さんほつといて、お菓子でもつまみなよ」

珠代はせんべいの袋を開けて、幸助の足元に置いた。

大嫌い。

幸助は心の中で、思い切り叫んだ。

大嫌い。

それが普段から思いの半分も伝えられない、彼のせめてもの反発の形だった。

ところが、

「どうしただ、ぼうず」

眩しそうに目を瞬かせ、幸助の顔をぼかんと見上げる作次。

そのどうしようもなく間の抜けた顔が、幸助をちよっぴり勇気付けた。

「ぼ、ぼく、幸助」

そう言ったきり、幽霊でも見たような目で立ち尽くす幸助の横顔を、五月の乾いた風が撫でていく。結局彼が言えたのは、そのひと言だけだった。

それでも幸助は、嘘のように肩の力が抜けていくのを感じていた。

「ほうかほうか、ぼうずが気に入らにゃあか。こりやわりいことを言ったな」

日に焼けた顔を皺くちやにして、作次はひとしきり笑い、

「幸助か。わしゃあ、あれだ。ほれ、長澤作次だ。ぼうずあなかなか根性があるじゃにゃあか。泣きん面の勇作とはえりゃあ違いだ」

自分の孫を引き合いに出して、作次は幸助の顔を頼もしげに眺めた。

「そんなふうに言うもんじゃないよ」

温和な顔からは想像もつかない、珠代の強い口調だった。

「あんなことになって、勇作ちゃんだつて寂しくて仕方ないんだよ」

珠代は険しい表情で、手元を見ている。

「あつ！……母さんだ」

アパートから出てきた母親の姿を見つけて、幸助はそのまま転がるように山道を下つていった。

「どうしただね……」

珠代が慌てて声をかけた。

「あれあれ、なんぞらあの子あ」

幸助の背中を目で追う珠代。

「お菓子持つてきやええのに……」

がっかりした様子で、珠代は掀げた菓子に目を落とした。

「あのほてい荘にあれしただに、ぼうずの家もなんか訳があるはずだよ」

バッタのように跳ねながら下りていく幸助の小さな後ろ姿を、作次と珠代は、じっと見守っていた。

「いま何時だと思ってるのっ！」

いつも通りの不機嫌な顔で、悠子は幸助を待ち構えていた。

「あたしは今夜から仕事だつて、言つてあつたでしょ」

悠子は幸助の頭を引っ叩いた。

「あなたはお兄ちゃんなんだから、しっかり奈津美の面倒みなきやだめなの」

頭ごなしに言うのと、悠子は大きなため息をつき、バス停に向かって坂道を下っていった。

「ほんとに、覇氣がないんだから……」

ハイヒールの音が、静かな田舎道に響いている。

「あつ、それから、火は絶対に使つちやだめよ。お風呂は沸かしてあるから、どんどん入つちやいなさい。いいわね！」

悠子の化粧の匂いが風に運ばれて、幸助の鼻にもう一度届いた。他人のようにめかし込んだ母親の背中を見送りながら、幸助は、家族がどこか遠くの知らない星に降り立ってしまったような、不安と戸惑いを覚えずにはいられなかった。

妹の奈津美は、引越しを理由に幼稚園をやめた。

確かに以前のように、自転車で三分といたった恵まれた環境ではなくなつたが、隣町。園長の話では、アパートから二十分ほど歩くことになるが、国道まで出てくれれば、送迎バスを差し向けるといふことだつた。しかし、本当のところ、悠子は以前から、やれ親睦会だ誕生会だといつた煩雑な幼稚園行事から、解放されたいと思つていた。それに職員たちの偽善的な振る舞いも鼻についた。

つまり悠子は、二十分早起きをしてまで、奈津美を幼稚園に通わせようとは思わなかつたのだ。そして何よりも、私立幼稚園の高額な月謝が、このさき家計の負担となるのは明らかだつた。

「ママ、おなかすいた」

おろしたての卓袱台の上に拵げた、お絵かき帳に顎をのせて、奈津美は寢言のように呟いた。

「ママっ！」

今度は絞り出すような声で、悠子を呼ぶ奈津美。

「ママなんていないよ」

幸助は勉強机に向かつたまま、気のない返事をした。

「じゃあ、おかあさん」

「母さんもない」

「どこに行ったの？」

「仕事」

「うそっ」

「本当」

「いつ帰ってくるの？」

「知らない」

幸助の背中を、呆然と見つづける奈津美。

昨夜悠子が、幸助にくどくどと話していたことを、奈津美はなんとなく思い出した。

「ママ……」

家の中に母親がいない環境など、奈津美は経験したことがなかった。

「今日から仕事に行くって、さつき母さんが言ってただろっ」

幸助は宿題を続けながら言った。

「しごと？」

「そう。お金がなきゃ、ご飯だつて食べられないんだから」

「ごはん？ ……」

奈津美のお腹の虫が、きゅーつと空腹を知らせる。

「わたし、やっぱりおなかつた」

仕方なく幸助に食事の催促を試みるが、彼は机に向かったまま、まったく反応を示さない。

「じゃあ、ママよんできて」

卓袱台を手のひらで叩いて、幸助の気をかかせようとする奈津美。

「ねえっ」

「うるさいなあ。朝には帰ってくるよ」

漢字ドリルのページをめくりながら、幸助は突き放すように言った。

「朝になったら、わたし死んでる。そしたら、みんなお兄ちゃんのせいだからね」  
奈津美は悪態ついて寝転び、足の裏で卓袱台を蹴飛ばした。

「死んじゃうよっ！」

隣に住人がいたら苦情が飛んできそうな勢いで、奈津美は叫びつづける。

「もう……。しょうがないなあ……」

幸助は鉛筆の先を前歯で、がりつと噛むと、ノートの上に放り投げて台所に歩いた。

冷蔵庫の中には、しなびたブロッコリーの塊と、絞りつくされたようなチューブのマヨネーズ。それに食パンが三枚。

初出勤の忙しさにかまけて、悠子は子供たちの夕食まで頭が廻らなかつたようだ。

冷蔵庫の中をいくら眺めつづけても、食材が増えるわけでもなく、仕方なく幸助は食パンに手を伸ばした。

「はい」

幸助は袋から食パンを一枚出して、奈津美の前に差し出した。

「やだ！」

奈津美は、ふいっと横を向いた。

「お腹すいてるんじゃないの？」

しつこく食パンを押し付けようとする幸助。

「やだ！ お兄ちゃんなんてきらい！」